

農を変えたい！東北集会／農業者が続ける熱い模索

谷口吉光（秋田県立大学）

2月3～4日、秋田市のカレッジプラザで「農を変えたい！東北集会 in 秋田」が開催され、東北全県から約150人の農業者や市民・研究者が集まった。

農業に関する会合は数多く開かれているが、大半は行政やJAなどが主催し、農家は聴衆として話を聞いただけというのがほとんどだ。しかし、この集会は違う。十数名の東北の農業者が1年前から集会を計画し、実行委員会を作って準備を積み重ね、ようやく実現にこぎ着けたのだ。いわば「農家の、農家による、農家のための集会」だ。

この集会は今回が初めてではない。昨年1月に第1回の集会が山形市で開催された時に「次回は秋田で」という話になったのだ。私自身も「先生も力を貸してくれ」と言われて副実行委員長を引き受け、準備作業にずっと関わってきた。

この集会に込めた主催者の思いを一言で言えば「競争原理と規模拡大を追求する現在の農政の流れを変えたい」ということだ。幸い、昨年12月8日に「有機農業推進法」が成立した。前回の本欄でも取り上げたが、「国が責任を持って有機農業を推進する」という趣旨のこの法律が成立したことによって、今回の集会の焦点は「有機農業を起爆剤に農業の現状を変えたい」という点に絞られた。

実行委員会ではいつでも熱い議論が交わされた。「ただ集会をやったというだけではダメだ。集会の最後におれ達の意見を出そう」「行政にも提出できる『政策提言』の形にしよう」という意見から、集会の最後に「農を変えたい！東北からの政策提言」を採択した。

5か条からなる「政策提言」には、農業者の率直な要望が盛り込まれている。国に対しては「有機農業をこれからの日本農業の中心と位置づけ、日本農業全体を食の安全や環境の質を高める方向に転換してほしい」。

消費者に対しては「もっと多くの消費者に国産の有機農産物や特別栽培農産物を食べてほしい。また農業についてもっと知ってほしいし、農業生産の現場に足を運んでほしい」。

子どもについては「次代を担う子どもたちにきちんとした食を知識と食習慣を身につけさせるために、食農教育や環境教育を一層推進してほしい」。

研究者に対しては「専門の枠を超えた、農業現場の要望にあった総合的な研究をしてほしい。農業者との交流や共同研究の機会をもっと作ってほしい」。

さまざまな思いを残して2日間の集会は終わった。秋田県の参加者からは「今回のつながりを一度きりに終わらせず、継続的な情報交換の場を作ろう」という強い要望が出て、「秋田県有機農業者協議会」（仮称）を立ち上げる準備が始まっている。農業情勢は相変わらず厳しいが、農業者たちの熱い模索は続いている。

（朝日新聞「あきた時評」 2007年2月24日掲載分を加筆・修正した）